



大方あかつき館報

第30号
2019年3月発行

あかつき

第29回 上林暁文学館企画展

『上林暁の考えたこと』

名勝入野松原の中にある上林暁の文学碑に刻まれた「梢に咲いてゐる花よりも地に散つてゐる花を美しいと思ふ」という言葉は、昭和30年に筑摩書房から発行された『現代日本文学全集40』に掲載されている。

当初は、川端康成氏の染筆による「上林暁生誕の地」という記念碑だけの計画だったところ、若かりし頃の植田馨さんたちが、「記念碑ではなく、文学碑にするべきだ」と強く主張して現在のものになった。この文学碑の言葉は、上林文学の神髄を表していると言われ、この町で育った者は少なからず精神的な影響を受けてきた。

上林暁は、文学には「哲学」と「詩」が大切と考えていたが、今回の企画展では、その「哲学」的な部分に注目してみた。「なぜ私小説を書くか」「私小説論議」「わが文学の途」では、戦時中または終戦直後に文学のあるべき姿や、私小説論について論説をしている。

なぜ私小説を書くか

■作家みづから、私小説を一つの文学流派としてかかげ主張するやうになつたのはいつ頃からだろうか。いま私はつまびらかにしないが、おそらく私たちの時代からではないであらうか。臆せずには云へば、私からではないだろうか。そのため私はつねに私小説作家として、論難の矢おもてに立たされてきた。しかし私は自己をふちまけた小説を書きながら、私小説作家といふレッテルをはられるまでは、みづから書いてゐるものが私小説だとは意識してゐなかつた。私にうてはやむにやまれぬ道ゆきだつたのだし、他の先輩の私小説にならつたのではなかつたからである。

■このやうに、私小説はその人が小説を書いてゆくうちに、おのづから書かれるものであつて、若し人がはじめから先きの私小説に従従して、それを自分の行く道とかがけるべきものではないと思ふ。

一九四二昭和十七年
（上林暁全集第一六巻）
『私小説論議（下）』

やむにやまれぬ気が、自然に自己をふちまける私小説におもむかせるものでありたいのである。

一九四五昭和二十年
（上林暁全集第一八巻）
『なぜ私小説を書くか（下）』

■歴史的現実の果敢なきを、我々はまのあたり見た。同時に、歴史的現実に乗つただけの流行の文学が如何に脆いものであるかを身に必みて感じた。そこで僕は不易の文学に就きたいと思ふ。不易の文学とは、深い情感と深い思索に根差さなくてはならぬ。つまり、文学を形作る要素のうちで、いつ如何なる時代にも不易なるものは、詩と哲学だと思ふ。然るに、日本の近代文学に最も欠けてゐるものは、この詩と哲学だ。僕は自分の文学に、詩と哲学とを取入れたと思ふ。

上林暁は、文学には「哲学」と「詩」が大切と考えていた。今回の企画展では、「私小説論議」「わが文学の途」に注目して、私小説を書くか、私小説論議、また終戦直後に文学のあるべき姿や、私小説論について論説しています。（上林暁文学館）

「私小説家は一生かかつて一つの長編を書いている。」

芥川龍之介



上林文学の哲学

上林暁の遺した言葉がある。

梢に咲いてゐる花よりも
地に散つてゐる花を美しいと思ふ
天の星を叩き落さうとは思はない
地の落花を集めた

彼は、私小説の中で、
どのように考え、
何を伝えたか、
だろうか……



主催：上林暁文学館/〒789-1931 高知県幡豆郡黒瀬町入野6931-3 大方あかつき館内
☎ 0880-43-2110/fax 0880-43-0222/E-mail: cakatsuki256@wk.ne.jp

生きる情熱

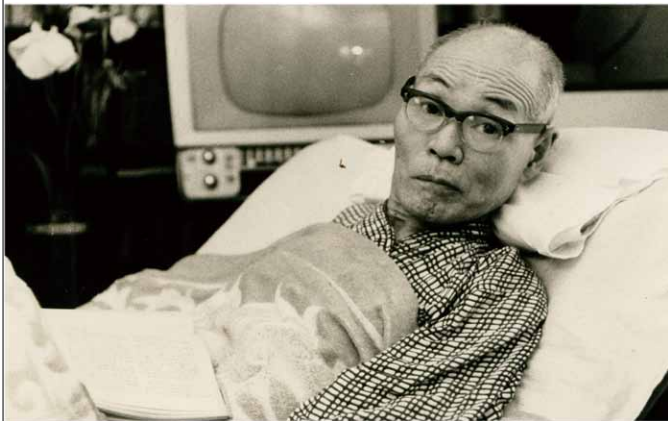
私は五月一日から、マルセル・ブルーストの「失つた時を求めて」を読みはじめた。長い作品であるので、いつになったら、読了するかわからない。今年中に半分読めれば大成功である。どんなに長い作品でも、少しづつ読んであれば、いつかはおしまひになる。

上林晩全集第一五巻「生きる情熱」
一九七六（昭和五二）年

上林晩は、決していわゆる強い作家でも、派手な作家でもない。地味な目立たない作家である。しかし上林晩の作家道をたどると、文学だけを己の天職として、ひたすら文学に精進することで、己の不幸と不遇を見事に克服し、生を全うした現代では希有な作家である。

ちなみに上林晩がブルーストを読み出したのは、七十四歳。中風で十四日間、寝たきりの病人であった。が、上林晩は、病気に屈することなく、文学の勉強にいそしむ。その姿は、世の病床にある人、不幸な境遇にある人、不遇をかかっている人を励ますにはおかない。

「上林晩との対話」サワタ オサム

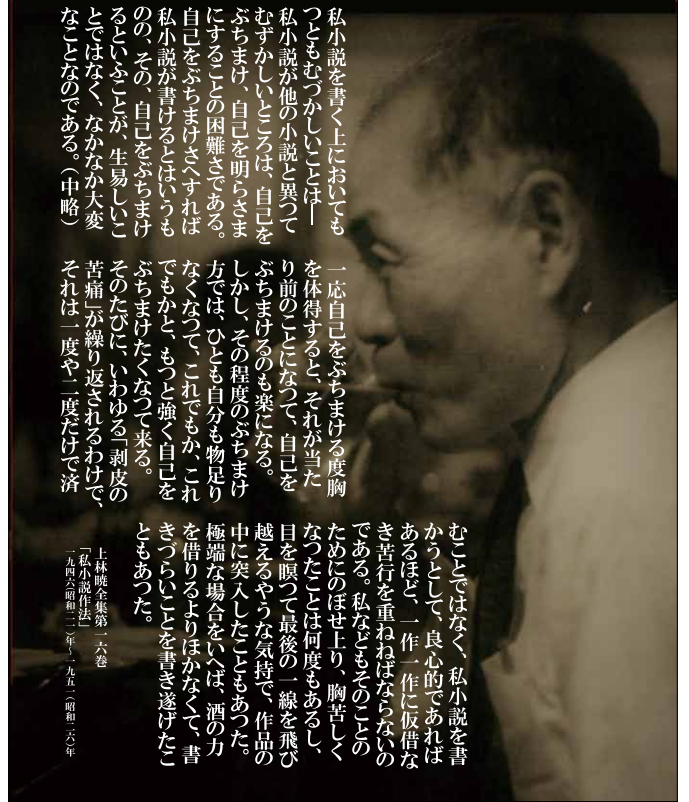


私小説作法

私小説を書く上においても一つもむづかしいことは「私小説が他の小説と異つてむづかしいところは、自己をぶちまけ、自己を明らかにすることの困難さである。自己をぶちまけさへすれば私小説が書けるとはいふものの、その、自己をぶちまけようといふことが、生易しいことではなく、なかなか大変なことなのである。（中略）」

一応自己をぶちまける度胸を体得すると、それが当たり前前のことになつて、自己をぶちまけるのも案になる。しかし、その程度のぶちまけ方では、ひとも自分も物足りなくなつて、これでもか、これでもかと、もつと強く自己をぶちまけたくなつて来る。そのたびに、いわゆる剥皮の苦痛」が繰り返されるわけで、それは一度や二度だけで済むことではなく、私小説を書くかうとして、良心的であればあるほど、一作一作に仮借なき苦行を重ねねばならないのである。私などもそのこのためにのぼせ上り、胸苦しくなつたことは何度もあるし、目を瞑つて最後の一線を飛び越えるやうな気持で、作品の中に突入したこともあつた。極端な場合をいへば、酒の力を借りるよりほかなくて書きつらいつことを書き遂げたこともあつた。

上林晩全集第一六巻
「私小説作法」
一九四六（昭和二一）年、一九五二（昭和二七）年



東京だより

小生は終戦直後、自分の周囲を見るにつけ、トルストイの「飢餓論文集」が読んでみたくなりました。飢民を救ふためのトルストイの「自由食堂」の運動には、今更聖者を感じましたが、その中に驚くべき一挿話があつたのを、小生は忘れることが出来ません。

或る県がひどい飢饉に襲はれたところ、それを伝へ聞いた隣の農民達は、その県へ行つて八十頭の馬を連れかへり、翌年の春まで養つて、また連れて行つてやつたといふのです。

この底抜けの大きな人間愛はどうでせう。小生が現在の日本に欲しいと思ふのは、これなのです。

上林晩全集第一八巻
「東京だより」
一九四六（昭和二一）年八月七日



ジイド断想

「私は少数者の徳を信じます。世界は、何人かの人々によつて救はれるでせう」とジイドが結んでゐるのは、多くの人々の関心を惹いたやうである。私も力づけられた一人であつた。ジイドは決して未来に絶望してゐないのだ。しかし「少数者の徳」と言ひ、「何人かの人々」と言はねばならなかつたところに、多数者への不信が感じられるのである。そして、「少数者」や「何人かの人々」に縋らねばならなかつたジイドの心理は、恐らく悲しかったのではないかと思ふ。私は力づけられると同時に、その悲しさを読み取る者である。

上林晩全集第一六巻
「ジイド断想」
一九四六（昭和二一）年、一九五二（昭和二七）年



2018年度 第2回上林暁文学館文学講座

『認知症と文学と時代』

― 人格を見つめる文芸作品と時代の視点 ―

講師…吉村 綱（園田学園女子大学名誉教授）



今日は、上林暁という作家を介して、いろいろな文学を考える話し方をしたので、タイトルを「認知症と文学と時代」としました。私たちの世代が背負う新しいテーマです。サブタイトルは「人格を見つめる文芸作品と時代の視点」とし、そこに三つ小説のエピソードを抜き出しています。

まずは、妻が入院し夫がその付き添いで自分の弁当を持っていく。食料難の時代でふかし芋を入れていた。付き添いの時に食べようと思って弁当箱を開けると芋がない。「お前、芋食べたのか」と夫が言う。妻は「私が食べたのよ。だってお腹が減っていたもの」と言う。夫婦の間で「ふ

かし芋を取った、食べた」という光景は少しユーモアが漂っています。

次は、母親が認知症で入院し、息子が時々見舞いに行くと、母は好き放題のことを言う。「あのね、きょうちゃんに良いご主人見つけたよ」とお母さんは突然言い出す。言われた息子は「きょう子つて、それは俺の妻だよ。俺の妻になぜご主人を見つくるって言うんだ」となる。そういうやり取りの中、ある日息子が病院に行った。お母さんが「正一、今誰もいないからね、お母さんにキスして」つて言う。息子はドキッとして「何言ってるんだよ。俺、お母さんの息子だぜ、子供だぜ」と言う。しつこく、しつこくお母さんが言うから、息子は息を止めるようにして母親にチュッとキスをする。そしたら母親が「正一、おまえっておかしな子だね。お母さんに何でキスなんかするの」と言います。（ねじめ正一『認知症の母にキスされ』）

三つ目、東という人物がいる。中村という旧友が亡くなった。その通夜の席に着くと同級生が話をしていた。「ああ、中村逝ったな」というような話をする中で「明日は葬儀か、中村のために弔辞を読んでやらないといけないな」「そうだ、中村の一番仲良かったのは東だ。じゃあ、東に：」と、話しているところへ東が娘に連れられて到着した。「おう」とお互いが挨拶をして、東が「中村が死んだなあ」と切り出してくる。友達が「それでな、中村の弔辞だったら一番仲の良かったお前だよ」と言われ、東は「それはそうだ、中村と仲良かったのは俺だ、だから俺が弔辞を読まないといけないだろう」と言う。ほかの友達は「これ

で東が弔辞を読んでくれるから良かった」と思っ
て胸をなでおろした瞬間に、東が「ところで、中
村今日来ていないが、どうしたんだ」と言うので
友達がビックリする。引率してきた娘は「ああ、
やつぱりこういう状況がでた」と言います。

最初の作品は皆さんご存知の『聖ヨハネ病院に
て』という上林暁の作品です。この三つの作品は、
いずれも心の混濁をかかえた人を描いた作品です。
かつては、このような精神状況の中にあつた人物
を「人格欠損」と呼ぶことがありました。「あな
たは人格欠損ですね」と言われたらどういう気持
ちになりますか。そういう状況を通ってきた時代
があつたわけです。また、こういう人が身内にい
たとき、誰が面倒を見ていましたか。時代はどう
でしたか。多くは女性の方にそのしわ寄せがいき
すなわち「女性の役割」というようなものが時代
の中にあつたわけです。

そこに有吉佐和子の『恍惚の人』という作品が
出てきました。この本は250万部を突破するベ
ストセラーになりました。この作品の中で、夫は
会社の仕事を一生懸命やっている。その夫の父「茂
造」が恍惚の人になった。結果的に、夫は二階に
寝て妻が舅に添い寝をした。なぜ？舅が夜に手洗
いに行く、薬も飲ませないといけない。そのため
に妻は、夜中に何度も起きなければならぬので
添い寝をするという生活をやっている。ある日、
夫は23時過ぎに帰って「おーい、あき子帰ってき
たぞ」と言ったとたんにギョッとした。渡り廊下
のところで妻と父が抱き合っているのです。ハッ
と思った。しかし、よく見ると抱き合っていたの

ではない。雨戸が明け放され、妻が自分の父親の帯を掴むようにして、父親は庭に向いて立っていた。廊下伝いに近づいて行くと、トボトボトボと音がして茂造が小便をしていた。妻はその父親が倒れてはいけなかったので抱えていた。「そっか、妻にこんな事をさせていたのだ」と思って、彼はその妻に気づかれないように二階に駆け上がり、改めて「おーい帰ったぞ」と言うと、奥さんは「あら、あなた要領悪いわね」と言う。妻はまだゆとりをもってくれている。ある日、添い寝をしていた。すると、舅の茂造が来て、あき子の上に馬乗りになった。あき子はパツとはねのけて「お父さん何するんですか」と言った。「あき子さん、あき子さんがいない、あき子さんがいない……」

と闇の中であき子を探している。それで、電気をつけると、ホッとあき子を見て父親は落ち着いた。また、ある晩「なんか変なおいがする」と目を覚ました。見ると、茂造が布団を跳ねのけて畳の上で何かゆったりゆったりとした動き方をしている。よくよく見ると右から左へ右から左へ、何をしているかという自分の便を畳に擦り付けている。あき子は、雨戸を開けて、風呂場に彼を引きずり込み寝巻を脱がせて風呂の残り湯で体中を洗う。「あなた、ちよつときて」と二階の夫を呼び、降りて来た夫は、「臭いな」と言っ、夫婦して夜中に畳を洗い、そして父親の体も洗う状況を有吉佐和子が『恍惚の人』に描いた。介護は妻の仕事で、夫は「すまんな、すまんな」と言いながら勤めに行く状況だったのです。

有吉佐和子はベストセラー作家となって喜ぶ調

子のいい作家でも、人気者になり喜んで見せびらかす作家でもなかった。「このような社会状況を隠すべきじゃない。これは日本の一つの現状だ」と社会にも訴えました。それだけじゃなくて、いろいろな組織・機関に呼びかけをし、その活動資金に自分の著作権料を提供しました。

『恍惚の人』が出版され、社会の関心を集めたのが1972年です。2000年には介護保険制度がスタートし、法的な介護サービスが整い始めました。それから国際アルツハイマー病協会の京都会議で「痴呆」という言葉が改められて「認知症」へと変わってきました。2012年、「認知症の施策の推進5か年計画」で、ショートステイとか介護保険とかの制度ができてきました。私は、文学はただ単に読み捨てられるものではなく、心の中に刻み込んでいく力があるという期待と期待を持っています。そういう作品を書いた作家だけが残ると信じています。10年後には五人に一人が認知症患者になると言われているので、これは他人事ではないのです。

耕治人の『そうかもしれない』という作品があります。彼は上林暁と同じ私小説作家で、登場人物すべてが実名で、年齢も72歳同士の夫婦そのままに描いています。「そうかもしれない」というこんなありふれた言葉が、一体どんな認知症の状況をとらえたのかをイメージしてください。

売れない作家の主人公。妻は永の貧乏生活のやりくりの末、痴呆症となり施設に入所する。毎日見舞に来てくれる夫の顔も識別できなくなります。その二人をいつも周囲の人たちが、「さ、奥さん

ご主人ですよ、ご主人に会えましたね」と呼びかけ、「奥さんご主人ですよ、ほらっ」と何度も何度も呼びかける。「よかったですね、よかったですね」と一生懸命盛り上げる。夫も「何か言ってくれるだろうな」と思いながら待つが、彼女は何も言わない。そして、気遣う職員はさらに盛り上げる。とたんに奥さんが、ニコツと笑いながら「そうかもしれない」と言う。どうですか、この残酷な言葉。

この小説は、耕治人としては珍しく30万部売れたのですが、彼はこの本が出版される前の年に亡くなりました。「痴呆と言われていた人たちの家族の光景をとらえた」ということで、この作品はクロージアアップされたのです。

こういう風にして、いろいろな作家が認知症と向き合う人々の光景を刻んでいきます。その介護の現場の負担のほとんどが女性の立場であったというのを、佐江衆一という私小説作家が『黄落』という作品で書きました。

(詳細説明は割愛)

やはり、認知症を発症した夫の両親と夫婦の問題です。そして、姑が亡くなります。その葬儀のすんだ夜、まず、「お母さんがかわいそうだったわ」と、娘がけんもほろろに父親を否定するような顔つきで部屋を出て行く。「何があったんだ」としつこく妻に「どうしたんだ、どうしたんだ」と聞くうちに妻が言うのです。「あなた、今日、葬儀の挨拶の時、私のこと一言も言ってくれなかったわ。参列の人に対して、自分の母がお世話になったと挨拶をしたけれど、今日に至るまで妻が自分

の母を介護してくれたっていうことを一言も言わなかった」。

さて、ここで問題です。特に男性諸氏はどう受けとめますか。男の沽券にかけてと、もう一つは身内の事を出すことはできないという思い。これはあるかもしれません。例えば、子どものことをベタベタほめる人の話は、あまり聞きたくないですよ。それと同じように「自分の妻が母親の亡くなるまで面倒みてくれたのだ」とは言えない。これは佐江衆一が提議した問題です。主人公の夫は、「そんなこと、俺はお前のこと本当に感謝していた。でも、あの席で自分の妻のことを言うことはできなかったよ。でも、ほんとに俺は感謝しているじゃないか」と言う。「でも、私の友達のところではそうでなかった。ご主人は葬儀の後で、本当に自分の父親の看取りを妻が丁寧にやってくれた。そういうことに対して感謝していると言って、参列者の前で妻に対して名前を呼んで、ありがとう」と頭を下げた」という。

私たちは、痴呆とか認知の問題だけを言っていますが、もう一方の見えないところに、介護をする立場の人に対する気配りや感謝や支援をするという問題が浮き上がってきているのです。

時代は、介護者の意識の葛藤から、認知症患者の人格とか内面の理解を描くという方向に進み始めました。人間は、ある人物の「不安定さ」「不確かさ」を見て「だからあの人は認知症なのだ」と見ていた。しかし、もう一方で「今はこうだけれども、かつてはこういう人だった。こういう人間性を持っていた人だった。今も、心の中に何か

を持っているかもしれない」というような見方をするわけです。身内であれば「今は、こういうようなお母さんだけれど、お母さんにはこういう人間性があるんだ」ということを見失わないで見ることができるかどうか。

ここで、認知症の課題に新たな理解と解釈を与えてくれるのではないかと考え、中島京子の『長いお別れ』という作品を紹介します。

最初に紹介した、旧友中村の通夜参列のできごとです。主人公の東昇平は、80歳前後9年前からアルツハイマー型の認知症になった。妻の曜子は72歳。夫婦には三人の娘がいるけれど、曜子は娘たちに夫の介護の手助けを頼まないで、通院にも、入れ歯の入れ外し、排便・排尿の介助も自分でやろうとする。しかし、この妻もやがて目の手術を受けなければならなくなった。この父親を娘たちがみなければならぬが、長女の茉莉は、夫の勤務で米国に住んでいる。次女の葉奈は、身近な所にいるが46歳にして思わぬ妊娠をし、第二子の臨月を迎えるおなかを抱えて動けない。末娘の美美はフードコーディネーターをやっていて、比較的動きやすく独身なので「あ、私がやらなくっちゃいけないだろうな」という思いに至っている状況。

こういう運びの中で、父親が転倒して大腿骨を骨折し、入院しなければならなくなる。大腿骨骨折の影響で下肢に行く血液の流れが滞っており、足先に壊死の状態が起り始めている。そこで、病院はどうしても家族に確認しなければならぬことがある。それは人工呼吸器の件。人工呼

吸器をつけたら外すことはできなくなる。かなり弱っているので会話もできず目も開けられない寝たきりの状態になり、最終的に体の他の機能が停止していても、人工呼吸器が酸素を送り込む限りその状態が続くことになる。もう一つは、胃に直接チューブで栄養を送る胃瘻。誤嚥のリスクはなくなるが、それが患者本人にとってのQOLを高めることになるかどうかを考えて、家族に選んで欲しいという。茉莉は、「望まないと思います」と即座に答える。体中にチューブを付けて意識なく生き続けたいと、昇平は思わないだろうと家族の中で結論付けたのも昨日だった。病院から家に戻っていた七日間、昇平は比較的穏やかに過ごした。父親が強く抵抗するのは、一日に四回訪れる清拭の時間、特に局部の洗浄は、何度やっても慣れず「なぜそんな目に遭わなければならないのか理解しがたい」と言わんばかりに、怒って喚きながら腕や足をつっぱった。夫が、曜子が口に運ぼうとしたスプーンを静かに制して「もういい」と食事を拒否した。その弱々しいけれども、はっきりした言葉を曜子は思い出した。頭も体もあんなに壊れてしまっているのに、夫はいつだって自分の意思を貫く。頭も体も壊れているのに、心をまだ持っている父または夫というものを家族は受け止めたのです。「人格欠損」という認識から始まった〈認知症認識〉に比べると、これは明らかに人としての存在、認知症患者の父の〈人格〉を受け止めている光景なのです。大晦日になって、姉妹は看護師に「母をいったん家に帰そうかと思う」といいます。そうすると、若い看護師は少しだけ

考えて次の一言をいうのです。「今夜は、できるならお泊りになったほうがいいと思います」父の危篤状況が話されたわけです。

小説は、次の展開にスッ飛んでいきます。これが『長いお別れ』というタイトルに繋がっていく内容です。場面は、アメリカにいる長女の家庭の状況が出てきます。カリフォルニア州にある公立中学校の校長室の大きなアームチェアに腰かけて、机の上に広げた書類を読んでいたミスターグランドは、ノックの音に目を上げた。「入って」ドアが開き、小柄なアジア系の生徒が顔を出した。校長は、脇にあったリストに目を落とした。そこには、学校に出て来ずに、アルマンド・ヒックマンの家で遊び惚けていた子供たちの名前が列挙してあった。クリスマス休暇の直前に報告を受けた彼は、休み明けに一人一人面接を試みることにしたのだった。タカシ・イマムラという男の子だろうと、グランド校長は瞬時に推測した。「坐って」タカシは校長先生の大きな机の右わきに置かれたパイプ椅子に腰を落とします。「タカシ、君に頼みがある」「何でもいいから話をしてくれ」と校長先生が言うのです。タカシが答えるのです。「祖父が死にました」男の子は突然そう言った。校長は話すのをやめて、静かにタカシを見つめた。「いつ」「おとといの朝でした」「そうか。おいくつだったね」「八十とか、そのくらい」「そうか、僕の父といくらも違わない。どうか、心からのお悔やみを受け入れてほしい。ご病気だったの？ 苦しんだんだろうか」と校長は聞きます。

「ずっと病気でした。ええと、いろんなことを忘れる病気で」「認知症（ディメンシア）か」という。

「なに？」

「認知症というんだ。僕の祖母も最後はそうだった」と校長が言います。

「十年前に、友達の集まりに行こうとして場所がわからなくなったのが最初だって、おばあちゃんをよく言ってます」

「十年か。ロンググッドバイ、長いお別れだね。おじいさんは、認知症で十年かかっていたのか、ロンググッドバイだね」タカシが聞きます。「なに？」

「長いお別れ」と呼ぶんだよ、その病気をね。少しずつ記憶を失くして、ゆっくりゆっくり遠ざかって行くから」

中島京子はアメリカではじめて「ロンググッドバイ」という言葉を知ったそうです。認知症の人を「ロンググッドバイの位置にある人だ。少しずつお別れを始めている人なのだ」という。その認識によって、私たちは、見限りも無視も出来なくなるはずです。タカシはそれを、この校長から教えられたのです。

有吉佐和子の作品よりも20年前の『聖ヨハネ病院にて』の上林暁の書き方は、妻と対等に向き合い最後に「僕はこういうふうなことをこの聖ヨハネ病院で書いているんだ」と言うと、妻は「あなたがこんな聖ヨハネ病院で小説を書くなんて、お洒落なことだね」というような雰囲気作品が結

ばれています。「私は妻をだましているのにいいのかな」と実に正直なかたちで向き合っている。これは、上林暁の作品世界を、ほんわかとした感覚「ロンググッドバイ」という今日の結論のところに繋がつている作品を書いていたのかなという思いにもつながります。

文学はいろんな光景をとらえてきました。今日、こういうお話を聞いていただく中で、一歩進んで、日常生活の中のこういう光景に対する心構えが少し変わってきたら文学の力というものが伝わったのかなと思います、お話を終わります。

※約二時間の講演内容を講師の許可を得て事務局で割愛、編集し掲載している



「大方あかつき館」開館20周年記念事業
約400人で盛大に盛り上がる！



講師：夏井いつき 先生

大方あかつき館が開館20周年を迎えたことを祝し、昨年10月5日（金）、ふるさと総合センターで記念事業が行われました。

記念事業は、世田谷ピンポンズさんによるコンサートで幕を開け、式典後、劇団the・創による上林暁作品の朗読と、園田学園女子大学名誉教授吉村稠さんと上林さんの孫・大熊平城さんによる文学トークが行われました。その後、俳人として全国的に活躍する夏井いつきさんが、「俳句をつくる 町をつくる 人をつくる」というテーマで講演をしました。

夏井さんは、「松山では俳句だったが、地域文化が町をつくり人を育てる」と強調し、祝福してくれました。

第十五回上林暁忌俳句大会

上林暁大賞に宮川恵子さん（黒潮町）

昨年8月26日（日）に、「第十五回上林暁忌俳句大会」が大方あかつき館で開催され、県内外から43名の方々の出席がありました。

大会は、午後1時から始まり、講師に植田紀子先生（元高知県俳句連盟会長）をお迎えしました。先生は、一字かえるだけでより感動的な句となる具体例を紹介し、「暁忌は秋の季語として熟成しているの、他の秋の季語を加えなくてもいいのではないか」と選評されていました。次いで、上林暁大賞等の入賞作品の発表が行われ、上林暁大賞に宮川恵子さん（黒潮町）、中山一志賞に畝崎桃代さん（土佐清水市）が選ばれ、その他上林暁賞九句、入選四句、佳作四句をふくめ、十九句の作品が選ばれました。

大会入賞作品

《上林暁大賞》

暁忌日矢放たれし今朝の海

黒潮町 宮川 恵子

《中山一志賞》

臥牛山と教え給ふや遠ひぐらし

土佐清水市 畠崎 桃代

《上林暁賞》

身ひとつの影の露けさ暁忌

宿毛市 篠田たけし

煩惱をかたちにすれば桃の種

四十十市 亀井しげみ

鯉飛んで潮のさし来るかきせ川

大月町 柴岡 弘城

私小説酒に煙草や暁忌

四十十町 山本 由美

津波碑は警告の碑よ海桐の実

四十十町 藤原佳代子

暁の妻女の墓碑よ白木槿

四十十市 稲田のぶ子

玫瑰や浦々青く輝ける

須崎市 橋田 愛子

夏旺ん鳩凜として卵抱く

黒潮町 戸田ゆき子

蚕室の文字の薄れや天高し

大月町 柴岡 文子

※入選四句、佳作四句は紙面の都合上割愛します。





上林曉文学のふるさと

あかつき

第30号

大方あかつき館

〒789-1193 高知県幡多郡黒潮町入野6931-13
TEL: 0880-43-2110 FAX: 0880-43-1022
TEL: 0880-43-2110 FAX: 0880-43-1022

「大方あかつき館」開館20周年記念企画展

上林曉文学館企画展 20年

と き 2018.7/3(Thu)～9/30(Sun)
と こ ろ 大方あかつき館 2F
(休館日: 木曜日・祝日・月末金曜日)

上林曉文学館 企画展 20年

「大方あかつき館」開館20周年記念企画展

2018.10/3(12/27)

「大方あかつき館開館20周年記念特別展」で、上林曉文学館が、開設以来実施してきた企画展の「総集編」ともいえる展示でした。

※ホームページで全パネルを公開中

上林曉文学館特別企画展 (期間 2018.10/3～12/27)

上林曉文学館企画展の20年

郷里を題材にした上林作品の中から、「歴史・文化」のトピックを紹介する企画でした。

※ホームページで全パネルを公開中

第28回 上林曉文学館企画展

上林曉と郷土の歴史・文化

と き 2018.7/3(Thu)～9/30(Sun)
と こ ろ 大方あかつき館 2F
(休館日: 木曜日・祝日・月末金曜日)

梢に咲いてゐる花よりも 地に散つてゐる花を 美しいと思ふ

第28回上林曉文学館企画展 (期間 2018.7/3～9/30)

上林曉と郷土の歴史・文化

今年の大学センター試験(国語:配点200点)問題の四分の一(配点50点)は、上林曉の作品「花の精」が使われました。上林曉の作品は、これまでもセンター試験を含む大学の試験に「薔薇盗人」「不思議の国」などの作品が何度か登場しています。

上林曉の「花の精」がセンター試験に取り上げられる!

上林曉顕彰会が進めている「文学の道づくり構想」の一環として、上林曉の文学碑(句碑)が、大方あかつき館の敷地内に完成しました。上林曉の碑は、高知県と熊本県に合わせて七基ありますが、今回の句碑で八基目となります。

上林曉顕彰会が進めている「文学の道づくり構想」の一環として、上林曉の文学碑(句碑)が、大方あかつき館の敷地内に完成しました。上林曉の碑は、高知県と熊本県に合わせて七基ありますが、今回の句碑で八基目となります。

上林曉の文学碑(句碑)が、大方あかつき館の敷地内に完成しました。

上林曉文学碑(句碑)が新たに完成

第30回上林曉文学館企画展 知恵こそ無限の資源なり

砂浜美術館の時代

砂浜が美術館だとすると...
美しい松原が作品です。
沖に見えるくらしが作品です。
砂浜に映くらさうな作品です。
足を産みだす海亀が作品です。
はだしで走り、目撃を探る「子ども」が作品です。
風と波が砂浜をデザインする模様は作品です。
砂浜に残った小鳥の足あとが作品です。

私たちの町には美術館がありません。
美しい砂浜が美術館です。

作品は24時間・365日展示され、時の流れるままに変化します。BGMは波の音、夜の照明は月の光...

と き 2019年4月8日(月)～6月30日(日)
と こ ろ 大方あかつき館2F 上林曉文学館
主 催 上林曉文学館/〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野6931-3 大方あかつき館内
TEL: 0880-43-2110/FAX: 0880-43-0222/E-mail: akatsuki25@iww.ne.jp
協 力 NPO砂浜美術館

「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」という砂浜美術館は、大方あかつき館に隣接した建物の無い美術館です。

上林曉が愛した「入野の砂浜・松原・海」を美術館と考えて取り組んだ30年をご紹介します。

第30回上林曉文学館企画展 (期間 2019.4/8～6/30)

砂浜美術館の時代